

富山の観光療法と観光哲学

—臨床的観光心理学と癒しクラスターの構造—

Sightseeing Therapy and Sightseeing Philosophy of Toyama

— Clinical Sightseeing Psychology and Structure of Healing Cluster —

大 藪 敏 宏

OYABU Toshihiro

はじめに—富山の癒しクラスターと観光クラスターとの融合と高度化—

富山は先用後利の越中薬売りで知られ、病を癒す和漢薬療法(natural medicine)の薬都としての伝統がある。また、日本最高所の温泉といわれるみくりが池温泉のほか、伝統的な立山信仰や薬師岳信仰ならびに薬師如来信仰との関わりで立山温泉に各地からの湯治客で賑わった歴史もある¹⁾。ここに温泉療法(balneotherapy)の伝統をみることもできる。また滑川市が設置した世界初といわれる海洋深層水体験施設「タラソピア」があり、その癒し効果および皮膚への効果等が学会で報告されている。ここに深層水を活用した海洋療法(thalassotherapy)の先駆的取り組みをみることができる。さらに、立山山麓では森林浴と転地効果を通じた森林セラピー(forest therapy)の基地が作られている。このように薬都としての伝統をはじめとして、富山にはさまざまな個性的な癒し資源が独自の形で集積している点で、独自の癒しクラスター(therapy・healing cluster)の素地と可能性がある。それらが競合しながらも有機的に結びつくことができれば、さらに新たな可能性へと発展できるかもしれない。しかし以上のほとんどが、この地域の急峻な自然史的地形と関わりがないわけではない。

さらにこの地域の急峻な自然史的地形に最大限に依拠する立山黒部アルペンルートという著名な観光ルートがある。しかもこの自然史的地形には、伝統的に立山信仰の文化史的遺産が深く結びついてきた。現代的観光と自然史的地形と伝統的文化遺産のそれぞれのクラスターが有機的に結びつくとき、さらに新たな癒しクラスターと観光クラスターが形成される可能性がある。また癒しクラスターの独自の生成構造が自然史的ならびに文化史的に解明されるとともに、癒しクラスターと観光クラスターとのハイブリッド化というテーマが浮上して、クラスター融合による高度化の構造と課題へと目が向けられるようになることが期待される。

本稿では、立山における自然史と文化史との収斂という伝統に注目しながら、現地実踏巡検の

考察を加え、この可能性について学際的な観点から理論的な研究を試みる。そもそも心の癒し(Seelenheilkunde)とはソクラテス以来、20世紀のウィトゲンシュタインに至る哲学の伝統であった²。それゆえに、それは心理学的研究であるにとどまらず、その学際性ゆえに哲学的な知見を要することになる。そこには立山曼荼羅の受動的絵画療法と布橋灌頂会の声明の音楽療法とを総合した芸術療法(art therapy)に、立山信仰の信仰療法(faith healing)の独自の効果を現代的に世俗化しつつ加えた、総合的な観光療法の可能性が浮き彫りになる。自然史と文化史とを収斂させながら、このような総合的で体系的な癒しクラスターと観光クラスターの形成をなした例は少ない。こうしたクラスター生成の構造モデルを抽出できるならば、文化論的意義があるかもしれない。

1. 観光資源化した布橋灌頂会と観光療法の可能性

日本国内の各都道府県等から寄せられた最新の観光情報を紹介しているオンライン・マガジンの『観光』の2006年11月号のNo.481には富山県の観光情報として、布橋灌頂会が掲載された³。そこでは9月16日(土)から17日(日)にかけて、富山県立山町芦峯寺地内において、「越中国立山、布橋灌頂会」が開催されることについて、以下のように紹介されている。

—「布橋灌頂会は、山岳信仰が盛んだった時代に、登拝が許されなかった女性を救済するために行われた儀式で、江戸時代には立山を代表する行事として全国に知られていました。1996年に国民文化祭で130年ぶりに開催されました。

立山を『癒しの場』として再発見し、活用するための試みで、全国から多くの女性が参加して行われる予定です。—

そしてその問い合わせ先としてクレジットされているのは、立山町役場内の立山町観光協会内の「布橋灌頂会実行委員会事務局」である。さらにそこには、この実行委員会によって作成されたこの行事の広報パンフレットの画像が掲載されており、そのパンフレットの中央には「橋のむこうに、新しい私があります。」というフレーズが大きく見えている。

ここからわかることは、第一に江戸時代の山岳信仰と結びついたかたちで一定程度以上の知名度をもっていたとされる布橋灌頂会が、1996年に130年ぶりに国民文化祭において開催されたことである。

第二に、この130年ぶりの復活は21世紀に入っても現代的な形で、つまりそれは地元自治体の一種の町おこし政策の一環として、山岳信仰と結びついた宗教的行事としてではなく、地元の観光協会による観光的行事として再生していることである。

第三に、江戸時代に行われていた宗教性を帯びた行事を、今日における心の「癒しの場」として「再発見」して「活用する」という点で、精神的癒しの場として一種の心理療法的な効果が示唆されているということも言える。

第四に、以上の第二の観光および第三の心理療法の点を総合的に考えるとき、この布橋灌頂会が癒しもしくはセラピー的な特徴をもった観光心理学のメカニズムを担い、もしくは観光療法とも言うべき特徴を帯びている可能性を認めることができる。

そして第五に、観光協会が作成した広報パンフレットの「橋のむこうに、新しい私があります。」

というフレーズに単なるイメージ戦略以上の内実がともなっているとすれば、ヨーロッパの中世文学の魂の「新生」思想を連想させるような文学的もしくは芸術的癒しにおける精神的新生と心理的再生の心理学的メカニズムの解明の手掛かりが得られるかもしれない。

本稿はこのような学問的仮説を念頭に、この行事に信仰療法を昇華した芸術療法を内包した 21 世紀の観光療法の可能性を取り上げる。観光心理学や信仰療法や芸術療法はともかく、観光療法という概念は未知のものであるが、立山の布橋灌頂会は観光療法という未知の概念を示唆しているようである。

2. 橋と新生の観光心理学

実際その広報パンフレットによれば、「真の癒しが求められる現代に、伝統の儀式がよみがえる。橋に敷かれた 3 本の白き布の上を、白装束に身を包んだ女人衆がゆっくりと歩む。声明の響きに導かれ、雅楽の調べにのりながら…胸中に様々な思いを秘め、癒しを求める彼女たちは、いったい何を感じるのだろうか…かつて江戸時代に『女人救済』の為に行われていた伝統の儀式が、今、『心の癒し』としてよみがえる」と紹介されている。問い合わせ先は立山町観光協会内の「布橋灌頂会実行委員会」事務局とされているし、共催に地元有力紙の北日本新聞社のほか、協賛等に地元ローカル・テレビ局のほとんど、後援に地元自治体の立山町などが名を連ねている。それゆえに、この癒しの儀式は、一私企業による集客事業というようなものではなく、数百年以上の歴史につながるような地域の伝統にもとづいて、かつ地域を超えて一定の全国的広がりも有していたような郷土的伝統行事という側面をも持っているものであることがわかる。

ここで「心の癒し」というようなことが前面に出て来ているのには、それなりの根拠があることなのだろうか。あるいは、単なるキャッチフレーズなのだろうか。後者であるのなら心理学的な根拠の探求は不要であるが、前者であればその客観的な根拠は心理学的研究に値する。

その手掛かりとなる報道記事がある。2005 年 9 月 19 日付読売新聞の報道「女性が極楽往生祈願 布橋灌頂会が復活 1840 年代の古文書参考に」の記事には、次のように記されている。

— 「 雅楽の調べと小川のせせらぎをバックに、朱塗りの橋をしずしずと渡る白装束の女人衆 —。霊峰・立山への登山を許されなかった女性たちが現世とあの世との境とされる『布橋』を渡り、対岸のお堂で極楽往生を願う『布橋灌頂会』が 18 日、立山町芦峯寺で、心の平安を求める癒やしの行事としてよみがえった。

白装束に菅笠をかぶった 80 人の女人衆は、橋近くの閻魔堂で懺悔の儀式に臨んだ後、3 本の白帯が渡された布橋に到着。物を見ることで煩惱を刺激されることを防ぐために目隠しされた女人衆は、神妙な表情で橋渡りの儀式を待った。

先導役を務める『引導師』の僧侶らが橋の中腹にさしかかると、『あの世』側から『来迎師』の僧侶が迎え入れ、女人衆は 3 列で白帯の上を、足元を確かめるように渡り始めた。厳かな儀式を一目見ようと集まった見物客も、この時はうっとりと眺めるばかり。女人衆は姥堂で儀式に臨んだ後、再び閻魔堂に向けて橋を渡った。

明治新政府の方針で断絶したこの儀式だが、『立山信仰の文化を後世に伝えよう』と、地元・芦

峠寺集落と立山町観光協会は昨年12月、実行委員会を結成。1000人以上が参加し、最も盛んだったとされる1840年代の古文書などを参考に儀式を再現した。

『宗教行事ではなく、自分を見つめ直す行事に』との願いから、一般客も有料で橋渡りが可能に。魚津市の主婦船崎節子さん(62)は『感動で胸がいっぱいになった。今後は断絶させることなく、ずっと続けてもらいたい』と話していた。」一

ここには「真の癒しが求められる時代」に再現された伝統的文化財の橋渡りの観光的儀式を通じて、心が清められる新生の感動を実感する観光心理学が記録されている。問題は、その精神的メカニズムであり、それがどのようにして可能になったのか、ということである。

3. 世俗化した宗教的習俗観念と臨床観光心理学

このような布橋灌頂会を「心の癒し」の行事として一種の観光的な気晴らしとして訪ねるにしても、そこには宗教的な概念というよりは習俗的な概念ないしは伝統文化的な言葉が登場する。たとえば閻魔堂の閻魔、それは宗教的な信仰心がなくても、嘘をつくと閻魔様に舌を抜かれて地獄に落とされるぞ、と日本人ならば誰もが幼い頃から聞かされてきた思い出がある一種の決まり文句である。それは宗教的な教えというよりは、嘘をついてはいけないという道徳的な観念と結びついたむしろ世俗的な教えを伝えられるときの決まり文句である⁴。つまり閻魔とは生きている間の行状の善悪の審判を下して懲罰を決定する地獄の裁判官として一般的に知られている地獄界の総帥であった。したがって閻魔堂で懺悔の儀式を通過するとは、自分の罪過がもたらす結果への畏れをめぐる心の救済と罪をめぐる癒しが関係している。

また引導を渡すと言え、死の最終宣告を言い渡してこの世の生への執着を諦めさせることであり、それはあの世への旅立ちの宣言である。しかしそれは同時に宗教的には衆生を正しい仏道へと導くことができれば極楽往生つまりは永久幸福の約束という意味も含んでいる。したがってそれは安心立命という意味での心の平安と罪からの解脱の約束をも意味し得る。それは死と地獄の苦しみという最大の恐怖とともに心の平安と癒しの約束という両義性を帯びてもある。死と地獄への追放という究極のハイリスクとともに、永久幸福と和解と癒しという最大級のハイリターンという両義性(Ambivalenz)を帯びたものは、フロイトの精神分析学が教えたように人の心を惹きつけ魅了する訴求力を発揮する⁵。地獄の苦しみと死への恐怖を思い出させつつ、紙一重でその恐怖からの永久救済をも可能とする。そのような両義的な橋への旅立ち、したがってその橋はこの世とあの世とをつなぐ橋という意味を帯びる、そのような架け橋へのゆっくりとした旅立ち、恐怖と安心とをつなぐ橋をゆっくりと進むのは、それがさらに世俗化されエンターテインメント化すればちょうどジェットコースターのケーブルがモーターにゆっくりと巻き上げられて最初のレールの昇り坂をゆっくりと引きずりあげられていくのにも似ている。その頂点を超えるとジェットコースターの客は地獄にたたき落とされるかのように急降下の恐怖を味わう。そしてその谷底から引き上げられて束の間の安心と再びの谷底への急降下を繰り返す味わった後に、コースターは安全に現世のプラットホームへと戻っていき、観客は生き返った気分を味わう。

それとよく似たように、芦峠寺の布橋の太鼓橋では目隠しをして見えない布橋の彼岸へと引導

師によって引導されていく。谷底からかなりの高所に架けられた朱色の木橋を目隠しをして渡るのだから、そこには一抹の畏れの緊張感が漂う。布橋の下の姥谷川の遠い谷底からは川の水音が、その畏れを癒すように、同時にその谷底の深さを知らせるように、聴こえてくる。だから川の瀬音は両義的(ambivalent)であり、それゆえに畏怖的であるとともに魅力的であるがゆえに治癒的でもあるという、一種の行動療法的効果を帯びることができる。

そして橋の向こう岸からは来迎師が迎えに来る⁶。仏教の来迎とは、臨終の人が念仏を唱えるときに阿弥陀仏が迎えに来て浄土へと導くことを指す。それは永久幸福の約束である。念仏を意味する声明がここで流れているということは、声明特有の催眠的効果とともにその約束に伝統的なリアリティをもたらす。

しかし、このような報道取材に対して、宗教行事としてではなく橋渡に参加した一般客からも「感動で胸がいっぱいに」となるという感想が出てくる、その癒しの心理的効果はどのようにして生み出されるのであろうか。その一端は既に示唆されている。宗教心理学的根拠が仮にあったとしても、「宗教行事ではなく」とも心理療法的効果があるとすれば、それはまた別の臨床心理学的な見地からの解明が期待される。それは宗教心理学とは別の領域のものであるとすれば、言わばかりに臨床観光心理学の課題ということもできる。

4. 灌頂会の意味

布橋灌頂会と言われる場合の、灌頂会とはどのような意味があるのか。灌頂とはそもそもインドで王が即位する時や皇太子を立てるときに行われたとされる儀式であり、つまり頭に水を灌ぐことによってその人がその地位に昇ったことを証明する儀式とされる。すなわち須弥山の四方にあるという四大海の海の水を頭に灌ぐことによって四方の全世界を把握したということ象徴するのが、即位灌頂ということになる。この考え方が仏教に入って、大乘仏教ではすべての修行を終えて完全な開悟を得て仏になる際に灌頂を受けて成仏すると考えられた。その灌頂の際に、仏の智慧を注入するという意味でその頭頂に灌ぐ水は智慧の水ということで智水とされ、仏の智慧がこの智水に象徴されていることになる。すなわち、灌頂とは悟りを開いて新しい生への展望を開き成仏して仏になるという意味で修行期間の修了を意味する卒業式もしくは成人式のような修行の成就を約束し証明する一種の通過儀礼のようなものであり、それは卒業式や成人式のような一種の達成感とともに過去の自分からの離脱と解脱を意味する通過儀礼の儀式と同様の感興をもたらす機会でもある。ここに既に卒業式や成人式のような通過儀礼の儀式と同様の精神的態勢が作り出されているのと同様の位置づけが確認される。

日本における初めての灌頂は延暦 24 (805) 年に最澄が行い、後に空海も同じ高雄山寺で行って、さらに後には平城天皇や嵯峨天皇も空海から灌頂を受けたとされる。この灌頂の代表的なものとして、結縁灌頂と受明灌頂と伝法灌頂などが知られている⁷。密教における結縁灌頂は、目隠しをした在家の信者に敷曼荼羅の上に華を投げて落ちたところの尊を有縁の仏として受けるといったものである。これは人を選ばないで広く一般の衆生に仏縁を結ばせるための灌頂である。受明灌頂とは真言の行者として密教を学ぶ資格を得る灌頂である。伝法灌頂とは密教の師匠として阿闍梨位を得ようとする者に大日如来の秘法を授ける灌頂の儀式であり、インドの王の即位や立

太子の際の儀式が大乗仏教に採用されたものとされる。

こうした灌頂の系譜を布橋大灌頂会に重ね合わせて考えると、まず閻魔堂で懺悔の儀式とともに三昧耶戒を授かることもされている。この三昧耶戒は伝法灌頂の際に授けられる戒とされるから、布橋灌頂は、一方で伝法灌頂の色彩を帯びているようにも思われる。他方で、布橋灌頂を受ける者は全国から広く集まって目隠しをした参詣者であり、また姥堂での儀式の伝えられる側面も考え合わせると、結縁灌頂の色彩をも帯びているようにも思われる⁸。さらにまた弟子の資格を与える受明灌頂の色彩も読み取られるとの観点から、広く一般者に仏縁を結ばせる結縁灌頂と、弟子の資格を授与する受明灌頂と最奥の秘法を授ける伝法灌頂との三つのいずれの性格をも合わせ持つ融合体という解釈も可能であろう。しかし、他方で広く仏縁を結ばせるという点で布橋大灌頂の灌頂は結縁灌頂であり、さらに古くから民間の習俗として行われていた流れ灌頂の観念も見られるという指摘もある⁹。というのは実際のところ、立山曼荼羅には流れ灌頂を視覚的に描いていると思われるものがあるからである¹⁰。

5. 観光の中の結縁と新生—胎内めぐりの偶然的恩寵の回路—

布橋大灌頂がもつ含意はこのように多様な側面を包含しながら、宗教の専門的な修行者だけでなく大衆にも仏縁を結ばせる結縁灌頂という側面が、特に広く来訪者一般にも開放された今日の観光的な行事としての布橋灌頂会との連関において、注目される。というのは、このような広く開放的な結縁思想は日本文化の伝統的な特徴とも言うからである。しかも、今日の布橋灌頂会への参加者は上述のようにあまり宗教的な意味を重視することなく参加して心の癒しを得ていることとの関係からも、この一般人への開放性は重要である。だからこそ、そこにある仏縁の結縁ということは今日の参加者においてはあまり意識されていない。逆に仏教思想の側から言えば、当人は仏教の意義を知らない場合にも、いつのまにか知らず知らずに仏縁を得るという救済構造があるとも考えられる。そうした日本の仏教的文化の救済構造の典型とも言えるのが「善光寺まいり」の例である。

有名な「牛に引かれて善光寺まいり」について、「思いがけないことが縁で、また、自身の発意ではなくて、偶然により方向に導かれること」をいうと解説される¹¹。今昔物語集でも知られるように、たまたま偶然にさらしていた布を隣の家の牛が角に引きかけたまま逃げたのを、自分の布を取り戻そうとした老女が追いかけるうちに善光寺参詣に導かれたという—そもそもこの話の構造は¹²、立山開山をめぐる佐伯有頼の逸話の構造と酷似している点で立山信仰との通底性を感じることができる。善光寺のこの故事にちなんで、小林一茶の「春風や 牛に引かれて 善光寺」という句も生み出された。それほどに、この故事は伝統化した伝説である。この伝説的故事においても、偶然を機縁として知らず知らずのうちに仏縁に導かれるという心の救済構造が成立していて、それが一種の文化心理学的伝統ともなっている。

偶然とも言えるような機縁を通じた観光的旅—心の癒しを求めていることを自分自身でも自覚しないうちに(たとえば牛にでも引かれるようにして)偶然に誘われたというような機縁の中で心の癒しを偶然的に体験するに至る物見遊山の旅—を通じて、心の救済もしくは癒しの文化的仕組みに知らず知らずのうちに入っていくという物見遊山の観光の典型が、実は信州の善光寺観光で

ある。

今も年間に700万人もの観光客が訪れるという善光寺は、言うまでもなく日本有数の観光地である。この善光寺観光の心理構造に、立山観光の観光療法の構造を解く観光心理学的鍵があるので、善光寺観光の心理的メカニズムを明らかにする必要がある。

江戸中期を代表する仏教建築とも言われる善光寺の本堂に入ると、まず板敷きの外陣に入る。入って左側に閻魔王が安置されている。中央には妻戸台とびんずる尊者と呼ばれる撫で仏が置かれている。撫で仏と呼ばれるとおり、この仏を撫でることによって病気が治るという御利益があると云われている。鎌倉時代に参詣した親鸞にちなんだ松もある。生前の善悪を審判し懲罰する憤怒の神と、病苦からの救済を司る恩寵の仏…。この対比は、地獄と極楽の対比とダイナミズムという、日本的観光旅行の定石の要約的再演のようにも思われる。布橋灌頂会でも立山曼荼羅でも、そして信濃善光寺でも、旅人の脳は同じダイナミズムを体験することになる。

拝観料を払って「内陣券」を受け取ると善光寺本堂の外陣から改札を通過して畳敷きの内陣に入ることができる。欄間で金色に輝くのは、来迎二十五菩薩像である。楽器で音楽を演奏しながら、往生する者を極楽から迎えに来る二十五菩薩を描いた来迎の場面の図である—この来迎の場面は立山曼荼羅においては図の右上方の浄土山の上空に描かれ、布橋灌頂会では生身の「来迎師」の来臨によって仮想的に現実体験する—。見落としがちではあるが、善光寺のその蓮華座に乗って来迎する二十五菩薩像の間には空席の蓮華座がある。この空席の蓮華座こそが、善光寺の参詣者を極楽へと誘うためのものと云われている。いつのまにか、観光客は参詣者となり、来迎の浄土教文化へと誘われている。いつのまにか、知らず知らずのうちにそうなのであるが、それは「牛にひかれて善光寺参り」の伝説に暗示されていたとおりである。そしてそれは同時に、フロイトのエディプス・コンプレックス論が示唆する無知性にも通じている¹³。

内陣の奥には内々陣があり、そこには一光三尊という中国六朝時代や日本の飛鳥時代など初期時代に多く見られる光背形式の阿弥陀如来像が安置された瑠璃壇がある。これが日本最古の仏像とも伝えられる先の秘仏である。それは日本仏教が分派する以前の最古の仏像ということになるゆえに、無宗派とも言われる宗派を超えた独特の位置付けを与えられることになり、天台宗および浄土宗の別格本山というのもこの独特の位置付けと関係している。内陣からさらに内々陣の右を進むと、床下へと降りる階段がある。これがいわゆる「胎内巡り」つまり「お戒壇巡り」の入り口である。

観光客の多くは知らず知らずのうちに、この階段へと誘われるが、階段を降りて行った先は全く何も見えない暗闇である。予想もしないほどの突然の真っ暗闇に驚き慌てふためきながらも、後ろの観光客に押されるようにして戻るに戻れずに衝撃的な暗闇の中をおそるおそるすり足で進んで行き、何度か壁にぶつかりやむを得ず道なりに曲がり方向を変え、暗闇の不安の中を彷徨するうちに、右手で腰の高さの壁を伝って行くといつの間にか知らず知らずのうちに「極楽浄土への錠前」に触れることになる。これが、その瑠璃壇上の秘仏の阿弥陀如来との結縁が知らず知らずのうちに得られるという仕掛けである。まさに「牛にひかれて善光寺参り」の言い伝えの衝撃的な暗闇版である。そして、暗闇の中で阿弥陀如来との結縁を結んだ後しばらく進むと行く手にやがて地上の眩しい光明が見えてきて、この「お戒壇巡り」の出口に辿り着き、地上へと戻ることになる。

地上に戻ってきたときに、当人は気づかないにもかかわらず知らないにもかかわらず結縁が成就されている。ということは、結縁が果たされて以降のその生は新しいものへと変貌している。

この「お戒壇巡り」における阿弥陀如来との結縁の意味は、いずれは訪れる往生の際には極楽往生へと誘うべく阿弥陀如来が来迎するという約束をいただくということであり、参拝者はこの結縁以降は往生に至るまで篤く三宝を敬い、とりわけ阿弥陀信仰に帰依するということである。だからこそ、「牛にひかれて善光寺参り」であり、この故事は知らず知らずのうちの結縁ということをつまりは自力によるのではなく絶対の他力による救済を示唆している(この結縁の無知的無自覚的構造は、伝統的立山信仰の立山開山の縁起に通底し、さらに立山の布橋灌頂会の結縁灌頂がもつ芸術療法的効果の観光哲学的背景となる一立山開山縁起においては「牛にひかれて」ではなく白鷹にひかれてであるが一)。

これは仏法を学ぶ暇も経済力もない無学な貧しい庶民でも救済(阿弥陀来迎)に与りうる回路である。それは、「牛にひかれて」知らず知らずのうちにという意味で偶然的な恩寵の回路でもある。地下の真っ暗な恩寵回路から明るい地上へと復帰した後、外界へと戻る際に内陣の欄干に輝く来迎二十五菩薩像をもう一度振り返るならば、自分の座るべき蓮華座が空席で待っていることを再認識させられることになる。この認識が自覚的であるかどうかは、必ずしも重要ではない。こうして絶対の他力救済は、暗い本堂の無意識の中で確信へと変わり確実化されることになる。このとき偶然性は必然性へと変貌するが、これが「運命」と呼ばれるものの心理的メカニズムでもある。暗い本堂とは、出産以前の無意識のエスの胎内(巡り)に通じるがゆえに、フロイト精神分析学のいう超自我の戒壇(巡り)に通じるという両義性(Ambivalenz)への通路でもある¹⁴。だからこそ、そこは訴求力と魅力をもつのである。胎内巡りとは戒壇巡りであるが、その入り口には戒律破りの罪を審判する閻魔王の審判庁があつて、良心の呵責を負う罪人にとって胎内巡りとは自らのエスつまり欲望の坩堝巡りであり罪巡りであり、それゆえの地獄の冥界巡り、言わばダンテの『神曲』の地獄の冥界巡りでもなければならぬ。中世キリスト教芸術の頂点を画すダンテの『神曲(Divina Commedia)』の地獄・煉獄の冥界巡りが「聖なるハッピーエンド(Divine Comedy)」であったように、この冥界巡りのどん底でダンテのパラダイス(天国)すなわち「極楽浄土への錠前」に触れて結縁の幸福に与ることができるというハッピーエンドの恩寵の回路が用意されている。にもかかわらず善光寺本堂の胎内巡りでは地獄巡りの原光景の代理表象つまり映像的イメージが少ない。ここに後述するような立山の芦峯寺の布橋灌頂会の心理的效果との違いの原因も成立する。これに対して地獄の冥界巡りの視覚的聴覚的效果が多く登場するのが立山観光であり、特に立山信仰における芦峯寺系の立山曼荼羅である。

6. 立山黒部アルペンルートの自然と文化

今日における物見遊山の現代的な観光のあり方に文化的な厚みを与えるものとして伝統的な仏教的な文化遺産が機能していることが、上記のように善光寺観光においても確認された。このように伝統的な宗教的文化遺産が今日の観光産業の重要な基盤となっているということは、京都や奈良という日本を代表する観光の中核がその神社仏閣であることから、実はごく普通の事柄である。さらに世界的にみても最も観光客を集めるヨーロッパの観光の中心は何かと言えば、それ

はドイツのロマンティック街道にせよイタリアのローマにせよ、古代ローマの遺跡や王侯貴族の中世的城郭以外に、その中心の大半を占めるのは教会建築などのキリスト教の宗教的文化遺産である。もちろんパリのルーブル美術館をはじめとする美術館めぐりも観光の重要な一翼を担うが、ヨーロッパの美術館や博物館を訪れた人であれば、その収蔵物すなわち観光と鑑賞の対象は中世以来のキリスト教美術関連のものが圧倒的な割合を占めるということを知っている。ヨーロッパにおけるキリスト教のその伝統的な宗教的文化遺産の蓄積量は圧倒的であり、数週間あるいは数ヶ月間をかけてもなお見尽くすことはできない。この宗教的文化遺産のいつまでも見尽くすことができないほどの蓄積量が、米国への観光と異なってヨーロッパへの観光がリピーターが多い理由であることも周知の事実である。その文化的遺産の蓄積量と質の高さが、人間を繰り返し惹きつけるのである。しかも、それらの観光対象を再訪し再々訪して感銘を受けたからといって、それはあくまでも観光対象として鑑賞しているのもであって、宗教的な礼拝対象となっているわけではない。こうしたことも、実は信濃善光寺や立山の観光と共通している。すなわち、日本の仏教遺産にせよ、ヨーロッパのキリスト教遺産にせよ、世俗化が進行した現代においては中世までのような宗教的な動機にもとづいてというよりも¹⁵、物見遊山的な文化財ないし観光財として大きな役割を果たしているのもであって、こうした伝統的文化財の存在と発見・発掘が現代の精神的需要に応じて人々を繰り返し惹きつけるためには重要なのである¹⁶。

美しい自然と古い文化的遺産とを訪ねるという点において、ドイツのロマンティック街道に立山黒部アルペンルートと比較するというようなことは、あまり考慮されてこなかった。それは、おそらく前者の魅力が主として古い文化的遺産において捉えられ、それに反して後者の魅力が美しい自然のアルペンの景観においてのみ捉えられることが多かったからとも思われる。そのことは両者の名称そのものに明瞭に示されているほどである。前者がロマンティック街道であり、後者がアルペンルートと称される所以である。

では、ここで後者の自然的景観を訪ねる中でどのような文化的経験ができるのか、ということ立山黒部アルペンルートを辿ることによって確認することにしよう。

長野県側から入るとすれば、信濃大町の駅から路線バスで標高 1433 メートルの扇沢駅まで来て、そこからトロリーバスに乗り換えて黒部ダムまで至る。ところでこのトロリーバスというのが、かつての黒部ダム建設の時に資材運搬のために掘削されたトンネルの中を約 16 分間走る。そして標高 1470 メートルの黒部ダム駅に到着すると、巨大な黒部ダムの上をエメラルドブルーに輝く黒部湖を眺めながら黒部平駅まで徒歩で散歩するのである。つまり、真っ暗なトンネルの中を約 16 分間トロリーバスに揺られた後に、まぶしいほど光り輝く空と湖を見るという体験にさらされるのである。これは善光寺の真っ暗な戒壇めぐりの後に光り輝く地上に出てくるのと同様の眩暈体験であることも注目される。ここでどのような心理的効果が生まれるのかということも注目される。しかも、夏になると頻りにテレビで全国中継されるように、この黒部ダムからはダム湖の水が盛大に観光放水されて陽光に輝いて虹がかかる。真っ暗なトンネルから金色のような陽光と虹の中に導かれるというところに、善光寺戒壇めぐりと同様の心理的仕掛けがあるとなれば、その心理的仕掛けの効果はどのようなものだろうか。

標高 1455 メートルの黒部湖駅から標高 1828 メートルの黒部平駅までは、黒部ケーブルカーに 5 分間乗ることになる。このケーブルカーは自然保護と雪害防止のために全線が地下を走る。つ

まり、また真っ暗なトンネルの中を揺られるのである。暗いトンネルの中を揺られて、再び眩しい陽光輝く黒部平駅に到着すると、立山ロープウェイで7分間の空中散歩を経て、標高2316メートルの大観峰駅に着く。ロープウェイの中からは新緑や紅葉などの四季に応じた360度の大パノラマの中に後立山連峰のアルペン的な景観を堪能しているうちに、やがて足下にエメラルドグリーンな黒部湖が遠ざかっていく。重い荷物を背負った登山の苦労をしないで国内第一級の山岳景観を楽しめる数少ない場所である。

ところが、大観峰駅からは立山トンネルトロリーバスに10分間揺られると、標高2450メートルの室堂駅に至る。室堂駅は立山観光の中心となる日本最高所の駅で、駅の外の室堂平に出ると、夏でも雪渓が残る標高3000メートルを超える立山連峰と剣岳の山岳景観や氷河地形が見られる。足元にチングルマなどの美しい高山植物が咲き乱れる花畑がある駅の外に出ると、陽光が地上の白い雪渓に反射して眩しさが二倍になる。つまり、この第一級の自然景観の美しさに人は目を奪われて息を飲むのであるが、観光心理学の観点から注目されるのは、ここでもこのトロリーバスが立山トンネルトロリーバスと名付けられているように、真っ暗なトンネルの中を10分間揺られるという体験を全員に強いるということであり、その直後に眩しいほどに光り輝く美しい自然景観の只中に人々を放り出すということである。

つまりこの立山黒部アルペンルートの特色は、他ではごく一部の登山者だけしか見ることができない3000メートル級の北アルプスの第一級の例外的に美しい自然景観を、そのような登山をする体力のない人にも乗り物に揺られているだけで見ることができるということだけではない。このことを可能にするためのプロセスとして、真っ暗なトンネルの中を乗り物に揺られては、他では見たことがないような稀に見る美しく光り輝く景色の中に突然連れ出されるという、目が眩むような体験を、このルートを訪れる人間に例外なく晒すということがある。ここに無意識に独特の心理学的効果が生じるであろうということが、とりあえず注目される。この心理的効果の内実は、フロイトの精神分析学との関係で重要な意味をもつ。

この室堂平で景色を楽しみながら自由に散策した後は、この最高所の室堂駅からはつづら折りの専用道路を高原バスに1時間ほど揺られながら標高877メートルの美女平駅まで降りてくる。美女平駅ではケーブルカーに乗り換えると7分で立山山麓の標高475メートルの立山駅に着いて、ここで地方鉄道に乗り換えれば1時間で富山駅に着く。したがって、室堂平から山麓まではトンネルはない。そしていわゆる男性的なアルペン的な景観とは室堂で別れて、立山駅まではいわゆる女性的とも言われるような美しい草原の中をバスの車窓から眺めるようになる。トンネルがないから車窓からは常に高原の景色が見られるので、その自然について解説の録音テープがバスの車内放送で流される。そして、この高原道路も自然環境保護の観点からマイカー乗り入れが禁止されているので、このアルペンルートを訪れる人は歩く以外はこのバスを必ず利用しなければならない、例外なしにこの車窓の景色とともにこの案内テープを聴くことになる。

このバスの立山景観案内テープでは、まず室堂を出発するときに室堂近辺にある美しい「みくりが池」や「地獄谷」が紹介される。どちらも観光パンフレットに写真も出ており、実際にそこまで訪れていない人でも、多くはその写真を目にしている。地獄谷については今も火山ガスが噴き出して草木も生えない荒涼たる景色であることが案内される。浄土山や大日岳や薬師岳などの周りの山々が紹介されて、途中では「天狗平」というバス停を通り過ぎると、「弥陀ヶ原」と

いう名の高原が広がる。ここでは餓鬼田と呼ばれる無数の池塘が草原の中に見られる。それはバスの車窓から見ると、ちょうど水田のようにも見えて、地獄で飢えた餓鬼が田植えをした田ながらも、その田には稲は生えず餓鬼はさらに飢えるという餓鬼地獄の話が紹介される。弥陀ヶ原を過ぎると、森林帯に入りブナや立山杉などの樹林の解説の中、途中で森林の途切れたところでバスは一時停止して、そこから遠望される「称名滝」が落差 350 メートルの日本一の瀑布と紹介される。やがてブナ林が始まると、「美女平」駅に着く。

この駅でケーブルカーに乗り換えるための待ち合わせ時間に駅の前に出ると、目の前に「美女杉」がある。その杉の脇に解説版が立っていて、「美女平」という地名の由来を説明している。それによると、一立山を開山した佐伯有頼の許婚者の美しい娘が有頼を追って立山に来ると有頼は山を拓くまで帰らないと追い返したという。しかたなく帰る途中で娘は一本の杉に、「美しき 御山の杉よ 心あらば わがひそかなる祈り ききしや」と祈ったところ、後にその願いがかなったという。後にこの杉を「美女杉」と呼んで、この歌を三度唱えれば恋の願いがかなうという恋愛成就の杉と伝えられる。こうしてこの杉の一带を「美女平」と呼ぶようになった。

数年前までは、実はこれとは異なる由来がこの杉のところに掲げられていたのだが、おそらくは近年の流行に合わせる形で、諸説ある由來説のうちの恋愛成就譚が採用されたようである。もともと掲げられていたこれと異なる由来は、実はそこから数十メートル離れた材木坂への下り道の入り口に今も掲げられている。



美女平駅前の美女杉

7. 立山黒部アルペンルート of 文化史と立山曼荼羅

以上のようにアルペンルートを進むとき、ある特徴が浮き彫りになってくる。それは最高所の室堂をピークとして長野県側に至る東側と富山県側の西側とで、景観が異なってくるということである。つまり、ルートの東側ではいわゆる男性的とも言われるような急峻なアルペンの山岳景観が主となり、西側では弥陀ヶ原などの高原を中心としていわゆる女性的とも言われるような緩やかな傾斜に広大な草原が主となるということである。東側では地形が急峻な山岳地形に対応して交通機関としては高原道路を開設することが困難なため(当初は電源開発のための物資運搬手段として)トンネルを掘削貫通させざるを得ず、このトンネルを利用して事後的に観光ルートを作ったために、東側では真っ暗なトンネルを通っては、「黒部の太陽」のような眩しい陽光輝く地点に至るという経過を3度辿るルートとなっているのであった。

これに対して西側は、自然史的には二十万年前からの立山火山の火山活動によって現在の弥陀

ヶ原周辺を中心に溶岩が流れ出て固まった溶岩原が広がり、それが長い年月の間に比較的緩やかな広大な高原となったために、その緩やかな高原帯にトンネルを必要としない高原道路を作ることができたのであった。つまり、そこには立山火山の自然史が、このような交通手段を可能にしたということができる。

と同時に、その自然史と深く結びついて西(立山)側では、「みくりが池」「地獄谷」「天狗平」「弥陀ヶ原」「餓鬼田」「称名滝」「美女平」といったきわめて個性的な地名が次々と出てくる。これは、「黒部ダム」「黒部湖」「黒部平」「大観峰」などといった東(黒部)側の地名と比べるとき明らかである。「大観峰」などは、熊本県の阿蘇にも同様に連峰が見渡せるような観望台に同じ地名がつけられているほど、一般名詞に近いものとも言える。これに対して、室堂から西側で登場する地名を見ると、「地獄」「餓鬼」と「弥陀」「称名」というように、どこか仏教的な世界観が匂って来るような地名であり、また「天狗」のような伝統的な伝説を思わせるものがあり、また「美女平」には何かロマンティックな香りもある。実際に上に見たように「美女平」の「美女杉」には恋愛成就をめぐるロマンティックな伝説が伝えられている—アルペンルートがロマンティック街道と重ね合わせられうる理由である—。

つまり急峻ないわゆる男性的景観の東側と柔かいわゆる女性的景観の西側という対比の他に、トンネルと自然景観中心の東側ルートと自然景観の他に伝統的あるいは文化的な要素を帯びた西側ルートという対比がみられる。

そして「地獄」「餓鬼」と「弥陀」「称名」という地名がいずれも仏教文化に関わっているだけでなく、上述の「美女杉」伝説が立山信仰の開山に関わるものであって、「美女杉」「みくりが池」の他に「浄土山」も、「地獄谷」「餓鬼



立山山中 地獄谷

田」「弥陀ヶ原」「称名滝」のいずれもが、立山信仰の網羅的な視覚化とも言える「立山曼荼羅」の絵に登場するものばかりなのである。つまり、西側ルートを通るとき、地名とその由来をバスの案内テープや観光ガイドで案内されるうちに、ちょうど「牛にひかれて善光寺詣り」と同様に観光客は知らず知らずのうちに立山信仰の文化的世界に誘われているのである。

たとえば立山曼荼羅の吉祥坊本には天狗になった武蔵坊が描かれているし、大仙坊A本にも天狗平の天狗が描かれている。「弥陀ヶ原」には弥陀の浄土のように光り輝いたという言い伝えがあるし、「弥陀ヶ原」の「餓鬼田」も「称名滝」も立山曼荼羅にはよく描かれる図像的テーマである。「称名滝」にはその滝の音が称名のように聞こえてきたという名前の由来の伝説があるし、仏の名を唱える、すなわち称名は極楽往生、永久幸福を約束するものでもあった。

立山曼荼羅の大仙坊A本や相真坊B本には「みくりが池」で亡者が首まで浸かって苦しむ姿が描かれている。これは越前の僧侶良慶が立山禪定登山の際に地獄谷の地獄池を侮って泳いだが無動明王の剣を持たずに泳いだら三巡り目に地獄へと溺れ死んだという立山地獄説話を描いたもの

である¹⁷。この三回巡ったという話にちなんで、「みくりが池」という名前がつけられたと言う。またその隣には、「血の池地獄」で苦しむ長い黒髪の女人の亡者が描かれている。この「血の池」は、現地においても観光ポスターによく登場する実際の「みくりが池」の隣に実際にあって、血の池は遊歩道から遥か下方にあるので近づくことはできないが、遠目にその池の水が赤くなっているのが見える。それは火山性の地質的特徴によってその赤色の酸化鉄を含んだ沈殿物によるものである。つまり、火山性の自然的地形がもたらした自然史的現象としての池の赤さなのであるが、立山のこの自然史的現象に日本の血盆経信仰という文化史上の現象が重ね合わされて、血の池地獄の立山思想が生み出されたのである¹⁸。

近年発見されたという芦峯寺宝仙坊所蔵の卷子本『血盆経の由来』からは、立山芦峯寺における血盆経唱導がどのように行われたのかを窺うことができる。

—「血盆池地獄とて俗にいふ血の池の地獄ハ、女人はかり墮るなり。貴も賤も一度女身を受る輩は、地神水神三宝荒神等を汚しまいらす罪咎により、かならず此地獄において一日に二三度ツ々血を飲され然られ并ニ鉄の杵でうたれ苦患をうくることかきりなし。…(中略)…越中の国立山は、日本無双の靈山にて、諸仏菩薩常に影向し自西方極楽浄土なり…血の池地獄といふて恐しき地獄あり…」¹⁹—。

ここに血の池地獄に落ちる恐ろしさが描写されるが、しかしその後で、次のように地獄からの救済の回路も唱導されている。すなわち、—「もし末世の女人、縦使十悪五逆の罪を作るとも、此血盆経を受持し、読誦努は変定して此地獄落ることなし」—。つまり、立山地獄における血の池地獄の視覚的映像を立山曼荼羅の絵によって訴えて、同時にこの『血盆経の由来』の思想によってその恐ろしさを広めつつ、同時にその地獄の恐ろしさから救済の方法を示し、たとえ「十悪五逆の罪を作るとも」、立山において血盆経を受ければ「此地獄落ることなし」なのである。ここでもジェットコースターの下り坂のように地獄に落ちるような恐怖のイメージを味あわせた後で、それからの救い上げられるような安心立命の仕組みが与えられている。立山曼荼羅の視覚的なトラウマに暴露した上で、そこから安全なところに戻るといふ療法は、今日の行動療法において暴露療法と呼ばれるものを想起させるが、立山信仰は立山の自然史に即するかたちで、イメージ暴露療法とも言えるような臨床心理学的療法を創り出していたとも言える。このような立山地獄をめぐるイメージが今日の立山観光の中でミクリガ池や血の池地獄の映像的な自然景観(実見であれパンフレットの写真であれ)とともに与えられるならば、このような伝統的な信仰療法が希薄化されたかたちであるにせよ、日常生活における様々なトラウマが癒される可能性が成立するのである。ここに立山信仰の信仰療法が、現代の立山観光の中で「牛にひかれて善光寺」知らず知らずのうちに



立山山中 血の池

無意識に心が癒され、「十悪五逆の罪」とまではいなくても都市の日常生活において日常的に経験する多かれ少なかれの良心の呵責がもたらしては無意識へと抑圧されて一時的に忘却されるトラウマを癒し、魂が救済され再生され、心が新しいアイデンティティへと新生するという新生体験の疑似的体験が得られる契機が与えられている。このようなまでの総合的な心理療法的な仕組みは信濃善光寺にせよ、京都奈良の寺社仏閣にせよ、あまり整備されていないと言いうる。ここに色彩強烈な地獄絵と来迎図を兼ね備えた立山曼荼羅に晒される立山の布橋灌頂会が、新鮮な新生体験をともなった心理的癒しの効果をもちうる理由が考えられる。かつての立山信仰における魂の新生体験とは、仏縁を結縁することによる仏教信徒としての新たな宗教的アイデンティティとともに来世を約束されるという意味での人格的アイデンティティの新生の体験であった。今日の立山観光においては、その立山信仰の道の上に立山観光のアルペンルートの自然史的景観が重ねられていて、かつての文化的伝統の一端が希薄化されたかたちで、今日の立山を訪れる人々に与えられている。立山観光が魂の再生体験や心の新生体験をとまなうような心理療法的構造をもっているとすれば、このような自然景観と文化伝統とともにであり、このような稀有の自然景観とともに立山の観光療法は無意識に成立していると考えられる。それは自然史と文化史とが混淆し習合する中で、つまり火山性の自然史と、山岳修験道的な靈魂の擬死再生儀礼と浄土教的な欣求浄土厭離穢土の文化史的伝統とが習合する中で²⁰、生み出されたものと言える。

8. 立山観光の風景クラスターと観光療法および心理療法の観点

さらに、「地獄」「餓鬼」と「弥陀」「称名」「浄土山」の地名の対比が見事である。「地獄」「餓鬼」はまさに墮地獄の悲酸と苦しみを明示しているのに対して、「弥陀」は立山信仰の中心にあって立山曼荼羅に描かれる矢疵阿弥陀を暗示するとともに「浄土」へと導くために来迎する阿「弥陀」来迎を暗示して浄土への救済を示唆している。「劔岳」が立山曼荼羅において亡者が全身を刺される針山地獄のような等活地獄の刀葉林を体現するのに対して、立山曼荼羅において「劔岳」の反対側に描かれる「浄土山」は文字通りに「浄土」を体現する。つまり、西側の一連の地名が示す観光クラスターは伝統的な立山信仰の中に流れ込んだ「欣求浄土」「厭離穢土」の浄土教思想の救済思想を描き出しているものである。立山地獄の地獄に落ちる恐怖のトラウマとともに、そこからの靈魂の救済という、言わばジェットコースターの急降下の恐怖とそこから弥陀の手の来迎による救い上げという伝統的仕組みが、西側ルートの柔和な風景のクラスターの中で繰り返されているのであった。

こうした西側ルートの地獄と浄土の対比的イメージの反復と、東側ルートの暗闇と眩しい光との視覚的に鮮明な対比的イメージの反復というクラスターの仕掛けが、ちょうど認知療法と行動療法という今日的な心理療法の対比のように、体系的に対照的に組み合わせられているのが立山黒部アルペンルートの臨床心理学的特徴であり、このように自然史と文化史とが伝統的にかつ現代的に結びついたかたちで観光療法的効果を気づかないうちにもたらすような観光療法クラスターは、全国的にも世界的にも多くないであろう。このクラスターから人間の精神にどのような影響が、どのようなメカニズムによってもたらされるのかということが明らかになるのならば、人間学的にも文化論的にも研究の意味があるであろう。

おわりに—観光療法と観光心理学の展望

第6節では、日本の仏教文化遺産にせよ、ヨーロッパのキリスト教文化遺産にせよ、世俗化が進行した現代においては中世までのような宗教的な動機にもとづいてというよりも、物見遊山の文化財ないし観光財として大きな役割を果たしているのであって、こうした伝統的文化財の存在と発見・発掘が現代の精神的需要に応えて人々を繰り返し惹きつけるためには重要である、ということを描した。しかし、立山にあるのは単なる宗教的美術品ではない。むしろ宗教的美術品としての価値は、京都奈良の神社仏閣や信濃善光寺のものに比べると低く評価されている。それゆえに残された立山曼荼羅などの文化財についても国宝や重要文化財の指定が進まない。これは、世界文化遺産の基準にも関係した真正性(authenticity)の成立の内実についての価値観や思想をとまなう文化理解の問題に関わるが²¹、文化理解は以下のような概念理解とも相関する。

反面で、すなわち立山の布橋灌頂会で触れる有形文化財が美術品としての質は必ずしも高く評価されているわけではないにもかかわらず、その布橋灌頂会という無形文化財の観光への参加を通じて得られる心の癒しもしくは再生と新生の心理的効果と精神的充実感は、宗教的意識がほとんどないにもかかわらず高いと伝えられている。伝統的な精神文化の結縁システムが背後で働く点において共通している信濃善光寺のお戒壇めぐりにおいても、一般的観光客がその戒壇めぐりを終えたときには突然に暗闇を経験した心理的興奮はあっても、そこでいかに心の癒しを得るかでの差異に注意を要する。それでも知らないうちに仏縁の結縁を得るという点は布橋灌頂会と共通していたのだが、この言わば観光療法として観光心理学的効果に差異がみられるという点が注目される。このような違いは、どのようにしてもたらされるのか、ということに研究が向ってその心理学的原因が解明されれば、観光学にとってだけでなく心理学的にも文化論的にも示唆は大きいであろう。同時にこのような観光クラスターと癒しクラスターとのハイブリッドの構造の解明は、欧州など世界各地の聖地巡礼の道におけるクラスター融合の世俗的効果と意味を考察する巡礼哲学に途を拓く²²。

知らず知らずのうちの結縁という意味で本人には隠された伝統的な宗教的救済構造の中で精神的な救済がなされてしまうという点において、善光寺観光と立山観光とは共通点をもっている。しかし、大きな違いもある。それは心理的効果であった。善光寺の胎内めぐりもしくは戒壇めぐりを通じての心理的な癒しや心の再生もしくは精神的リフレッシュの内実である。その真つ暗な胎内めぐりは、どこか遊園地のお化け屋敷観光にも似て、おっかなびっくりに興奮するという娯楽的な感興はあるが、布橋灌頂会で報じられるような参加者が体験する心の癒しや精神的な再生の体験を感じるとするという心理的効果とは差異がある。

とすれば、今回示されたような善光寺観光と立山観光との共通点にもかかわらず、布橋灌頂会の場合には心理的な癒しと精神的再生と新生の体感が得られるのはなぜなのか、その理由の一端は本稿において示唆された。さらに詳細な解明が残された課題である。これが観光心理学に残された次の課題であるが、こうした研究は臨床心理学的アプローチが重要となるゆえに、観光臨床心理学とも言うべき分野となるかもしれない。

この問題は精神分析学や比較文化論のほか、さらに国際日本学の今日的課題にも関連する問

題も含んでおり、学際的な観光哲学の研究が求められることになる。資源は採掘されたり保存されたりするだけではない。それに先駆けて資源は発見されなければならない。しかし何が人間的生の資源であるかは、創造的技術の従属変数である²³。石油も内燃機関などの利用技術が発達するまでは特別な資源ではなかった。「概念なき直観は盲目である」(カント)所以である。したがって資源の発見には、創造的な技術開発を可能にする知的活動が先立つ。したがって、たとえクラスターがあっても、それがクラスターであることを構成する知見が先行しなければ、新たなクラスターも新たな資源も発見されることはない。発見には、概念の新構成すなわち発明が先立つ²⁴。富山の癒しクラスターと観光クラスターとの融合と発見と高度化の前提として、富山の観光哲学が先行しなければならない所以である。

(註)

¹ 立山信仰および薬師岳信仰ならびに薬師信仰と立山温泉との関わりについては、富山県[立山博物館]『もうひとつの立山信仰—立山信仰と立山温泉—』、1992年、33頁以降、参照。

² R. Brandt, *Philosophie: eine Einführung*, Philipp Reclam jun. Stuttgart, 2001, S.8.

³ <http://online.nihon-kankou.or.jp/topics/0609/041.html>

⁴ 幼年時における宗教的罰の記憶がもたらす精神的影響、つまり「幼年時代の諸体験の痕跡(Spur von Kinderheitserlebnissen)」および(父親による)「懲罰や威嚇の記憶(Erinnerung an eine Züchtigung oder Drohung des Vaters)」については、S. Freud, *Die Traumdeutung, Gesammelte Werke*, II/III, S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main, 1942, 1998, S.204, S.208. フロイト『夢判断』上巻、高橋義孝訳、新潮文庫、1969年、255頁、260頁。

⁵ 「感情アンビヴァレンツ(Gefühlsambivalenz)」および「アンビヴァレンツの夢表現(Traumdarstellungen des Ambivalenz)」については、S. Freud, *ibid.* S.433. 前掲邦訳下巻、155頁、156頁。

⁶ 芦峯寺系立山曼荼羅におけるの引導師および来迎師の描かれ方については、福江充『立山信仰と布橋大灌頂法会—加賀藩芦峯寺衆徒の宗教儀礼と立山曼荼羅—』桂書房、2006年、169頁以降参照。

⁷ 中村元『佛教語大辞典』東京書籍、1981年。

⁸ 福江充『立山信仰と立山曼荼羅—芦峯寺衆徒の勸進活動—』岩田書店、1998年、66頁

⁹ 福江充『立山曼荼羅—絵解きと信仰の世界—』宝蔵館、2005年、114頁。

¹⁰ 第14代将軍の徳川家茂およびその正室の和宮を施主の代表者とする識札が張られている1866(慶応2)年成立とされる「立山曼荼羅 吉祥坊本」。富山県[立山博物館]『立山曼荼羅 物語の空間』平成17年度特別企画展解説図録、2005年、29頁、42頁、参照。

¹¹ 日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』第2巻、小学館、1982年、48頁。

¹² 『善光寺縁起』と『法華経』の「化城喩品」との関係については、五来重『善光寺まいり』平凡社、1988年、参照。

¹³ 神経症の罪責意識(Schuldbewußsein)とエディプス・コンプレックスとの関係については、S. Freud, *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse, Gesammelte Werke*, X I, S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main, 1944, 1998, S.344ff.

¹⁴ 無意識への回路が超自我に隠れた坑道で通じているということについては、次のトポス論を参照。S. Freud, *Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse, Gesammelte Werke*, X V, S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main, 1944, 1996, S. 85.

¹⁵ C. Taylor, *Modern Social Imaginaries*, Duke University Press, Durham and London, 2004, pp.185.

¹⁶ 仏教を心理学ならびに心理療法として捉える視点については、安藤治『心理療法としての仏教—禅・瞑想・仏教への心理学的アプローチ—』法蔵館、2003年、参照。

¹⁷ 福江充『立山曼荼羅—絵解きと信仰の世界—』、前掲同書、69頁。

¹⁸ 立山の血盆経信仰に関しては、次を参照。高橋奈緒美『「血盆経」と女人救済—血の池地獄の語り—』を中心として『国文学解釈と鑑賞』56巻5号、至文堂、1991年5月。同「血盆経信仰霊場としての立山」『山岳修験』第20号「立山特集」、日本山岳修験学会、1997年11月。

¹⁹ 福江充『近世立山信仰の展開—加賀藩芦峯寺衆徒の檀那場形成と配札—』岩田書院、2002年、406頁以降。

²⁰ 立山信仰と擬死再生儀礼との関係については、菊池武『我が国の擬死再生儀礼と立山布橋大灌頂会(後編)』富山県[立山博物館]、1995年、参照。

²¹ C. Taylor, *The Ethics of Authenticity*, Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1991.

²² 西洋における観光化したキリスト教の聖地巡礼の世俗化を可能にしたキリスト教文化史については、“agape, or charity”から”affirming love for the world”への展開、世俗的な人間中心主義のキリスト教的起源にともなうキリストの受肉の再解釈の分析に初期ヘーゲルのキリスト教研究における「愛による運命との和解」と「生」の思想の影響の痕跡がみられる次を参照。C. Taylor, *Source of the Self, The Making of the Modern Identity*, Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1989, pp.270. このように展望するとき、心象風景における風景クラスターの生成と平行した癒しクラスター(healing cluster)の成立構造には、キリスト教文化史の中に移入された”hen kai pan”というギリシアの汎神論思想の精神構造を看取することができる。

²³ B. Stiegler, *Philosopher par accident : Entretiens avec Elie During*, Paris : Galilée, 2004.

²⁴ I. Hacking, *Representing and Intervening : Introductory Topics in the Philosophy of natural science*, Cambridge University Press, Cambridge, 1983.

